



親として

思いやりの心

思いやりの心は、先天的なものではなく、生まれてから後の体験や学習によって形成されます。

思いやりの心を育てていくためには、次の二つの側面からのアプローチが考えられます。

一つは、他人の喜びや悲しみ、痛みや苦しみを自分の感情として受け止めるという情緒的な側面です。この情緒的側面は幼いときの母親とのコミュニケーションによって培われるそうです。

二つ目は、何が良いことであって、何が悪いことなのかということを知識として学習し、身につけていく認知的側面です。つまり、思いやりの心は、幼いときに培われた健全な情性と、その後学習する道徳的な価値観の融合によって育成されます。

とが、子育ての基本でしょう。

私はわが子に接するときに次の三つを心がけています。

●良さを認め、ほめることの重視

大人であっても、ほめられたり讃えられたりすれば「やる気」が出てくる。自尊心を強くさせる基本である。しかし、「悪いこと」は悪いとしっかり論ずる。

●必ずあいさつを交わす。互いに声をかけあう

「行って来ます」「いつてらっしゃい」のささやかな言葉の中にも、互いに相手を思いやる気持ちが込められている。自尊だけでなく、他者を気遣う気持ちの育成にもつながる。

●何か仕事(課題)をさせる場合は、まず「してみせて」「まっことやり方を示せば、子どももやり易い。でも、なかなかすぐにはやり出せない。だから、時間を保障してやる。

偉そうに言っても、どれだけが子に影響しているのやら疑問の多い毎日です。しかし、できる限り「後ろ姿」を見せる毎日を送っていききたいと思います。



便利さの落とし穴

先日、家族との会話の中で「何年前の生活水準に戻れるか?」という話が話題になりました。一九九九年の暮れのことです。コンピュータの誤作動問題が騒がれていたときです。

我々の生活は、ここ数十年の間に大変便利になってきました。家電製品は完全に普及し、自家用車も一家に二台、三台という状況です。歩く機会は少なくなり、ちょっとした距離でも自動車で移動しています。必要な物も、ほとんど手に入る生活を送っています。何不自由ない生活と言っても良いでしょう。そんな私たちが、十年前・二十年前の生活水準に戻れるはずがありません。なぜなら、人間は便利な生活を手に入れたら、二度とその生活を手放したくないと考えるからです。快適な暮らしを味わってしまうと「便利さ」に依存してしまい、耐性が低下してし

自尊心を育む

自尊心とは「自信・自負心・誇り」といった自分自身の価値づけを示すもので、日々の生活の中でたくさん時間をかけて根気強く育まれていくものです。子ども

の良さを保持し、認めてあげることとを繰り返して「私の良さは認められている」という気持ちを持ち、強いものにしていけば、承認欲求が満たされて、物事を前向きに考えるようになります。やがて、自分がかげがえのない存在であることを自覚するようになるのです。

大人の背中

また、子ども達は、大人の言動を大変よく見ています。どんな場面でも、どんな態度、行動を取るのかを観察しています。そして、モデルとしています。大人達が子どもの手本となるような毎日を送ること。背中を見せて育てていくこ